

創立146周年記念式典校長式辞（令和2年11月20日リモートで実施）

菊薫る秋の佳き日に、創立百四十六周年の記念式典を挙げていただけますことは、大変感慨深く、また、大きな喜びであります。新型コロナウイルス感染症対策のために参加いただけなかった来賓の本校同窓会入江泉理事長、PTA福原弘之会長、講演をお願いしていた京都大学大学院医学研究科小川誠司教授からの祝福の気持ちがこの空間にあるような気がします。がん研究の世界的権威である小川教授については、来年度の147周年記念式典での講演をお願いする予定です。

さて、146年という歴史は全国的にも屈指の長さですが、本校の起源はさらに遡ることができます。寛文6年（1666年）、岡山藩主・池田光政公が岡山城西ノ丸、現在の岡山市市民会館のあたりに設けた藩校まで行き着くことができ、全国でも稀な、長い歴史をもつ学校と言えます。

その後、岡山の藩校を含め、旧来の藩校は政府の政策で一律に廃止されましたが、明治7年（1874年）6月、岡山城西ノ丸跡に、教員養成の目的で温知学校が開設されます。8月には教員志望ではない生徒も受け入れることになりました。本校はこの年をもって、創立の年としています。

明治12年（1879年）には、岡山中学校として独立、その後、明治29年（1896年）11月21日、岡山城城郭内に新校舎が完成し、移転しました。明日になりますが、11月21日を創立記念日とする所以はここにあります。大正10年（1921年）には、現在の岡山操山高校の前身でもある岡山県第二岡山中学校の設立に伴い、本校は岡山県第一岡山中学校いわゆる一中となりました。

一方、昭和11年（1936年）には、岡山県第二岡山高等女学校いわゆる二女が新設されました。その後、戦後の教育改革が進められる中、この二校はそれぞれ、岡山県立岡山第一高等学校、岡山県立岡山第二女子高等学校となり、昭和24年（1949年）8月、両校は統合されて、岡山県立岡山朝日高等学校となりました。そして、昭和28年（1953年）、分散していた校舎が全て旧制第六高等学校跡地である、現校地に移転・統合され、現在に至る本校の姿が整いました。

本校は、敷地内に流れる川や多種多様な樹木など広大で美しい自然空間と国の登録有形文化財である正門など明治時代の建物や蔵書数8万冊を超える独立した図書館など知的教養を志向する精神空間をもつ全国屈指の伝統校です。同窓生は4万人を超え、同窓生の皆さんが、各界・各分野で広く活躍されていることは、本校の誇りとするところです。

「日本の現代物理学の父」と呼ばれ、日本で初めて核粒子加速装置を完成させ多くの弟子を育てた仁科芳雄博士、全日本空輸の社長であり日中国交回復に尽力された岡崎嘉平太氏、最近の新聞報道でも、ノーベル文学賞に関連して海外からも高い評価を受けられている作家小川洋子氏、世界的なロボットスーツの開発者である山海嘉之筑波大学教授兼サイバーデザイン株式会社CEOなどが大きく取り上げられています。

岡山朝日高等学校になってから、すでに71年の歳月が流れています。その間、「自主自律」と「自重互敬」の教育方針は脈々と受け継がれてきました。自主自律とは、なすべきことを自ら考え、自らを厳しく律し、それに基づく自由を尊重する態度を育成することであり、自重互敬とは、自らを大切にし、教養を高め、品位を保って、他人を敬愛することのできる人間になることの大切さを説いたものです。

そして、これらの精神は、自らなすべきことを考え、主体的にリーダーシップを発揮して新たな社会を牽引しようとする高い志をもつことによって一層磨かれ、高まっています。

例えば、自主自律に関して、新型コロナ下の学校生活で二つの印象的なことがありました。

一つは、臨時休業期間を中心に本校独自に行ったオンデマンド型と添削のオンライン学習です。本校オンライン授業システムのトップページには、「添削・質問が多く寄せられています！みんな頑張っています！よく考えて、わからないときは質問しましょう。（よく考えてから!）」と常に掲載されていました。同時双方向型のオンライン学習を導入したとしても、自分自身でしっかり考える勉強方法がなければ力は付きません。本校卒業生が執筆した今年度の「受験記」にも「モヤモヤするなど思ったら、どこが納得出来ないのかを徹底的に考える」「その問題が問題集に選定されている意味を考える」「ただ用語の意味を覚えるのではなく、理屈で現象を理解」など多くの自分が考える勉強方法が語られています。フランス現代思想を専門とする哲学者・千葉雅也氏は、深く勉強するための原理と実践を解説し、次のように述べています。

学校の授業では学ぶべきことをすべて教えてくれるわけではありません。勉強というのは、自分で考察するのが本体であり、教師の話は補助的なものです。授業を聞くときのポイントは、多くを吸収しようとするよりも、教師が「いかに工夫して少なく教えているか」に敏感になることです。

本校の教員用の授業参観シートには「わかりやすい授業になりすぎているか（教えすぎているか）」という項目があります。私は、他校でこの

ような表現を見たことはありません。

二つ目は、今年度の朝日祭です。生徒会を中心に自主的・主体的に感染症対策を徹底しつつ3日間の日程でほぼ例年なみの活動をする事ができました。3年生は、戦後本校のすべての生徒が取り組んだ、汗と涙の共通体験である仮装行列もやり遂げることができました。このような経験こそが、正解が一つに決まっていない課題について仲間と協力しながら納得解をつくり出す力、現在注目されている非認知能力を育成するのであり、体育祭の閉会式では、校長として、このような生徒たちと共に学校生活を送ることができることを誇らしく思いました。自主自律の精神はしっかりと発揮されているのではないのでしょうか。

自重互敬については、品位を保って他人を敬愛することにより、本校の最も強みとする「共に高め合う友人」が生まれていると思います。資料として京浜同窓会の今年度の会報の一部を配布しています。執筆されている北野譲治氏は小説のモデルにもなっている人物ですが、4月には本校に多くのマスクを寄贈いただきました。くしくも講演をお願いしていた小川教授もこの小説に登場されており、本校とのやり取りの中で、北野氏は次のように述べられています。

母校の朝日高校に感謝しても仕切れないことがございます。それは、在学中に、生涯の友となる小川誠司と出会えたことです。この奇跡のような出会いが、私にとっては何倍にも、もしかすると何十倍にも実りある豊かな人生を経験させてくれているからです。彼のような志を高く持ち続ける友人に支えられていることを実感するようになると、聳え立つような大人物と会った時でも、畏敬の念を抱きつつも決して臆することなくお付き合いが出来るようになること、そんなことを後輩の皆さんにお伝えできるなら最高の幸せです。

自重互敬のつながりを感じます。今年度の「受験記」には、「昼ごはんの時相談事や愚痴を聞いてくれた友達や、英単語やイディオムを覚えるために毎週一緒に小テストをしたり、社会の問題を出し合ったりした友達」「仲間と授業を受け、解答を見せ合い、添削の進捗状況を尋ね合いながら」等のほっこりする記述もあります。在学中の思いや表現と卒業後何十年も経ってからのそれ異なりますが、伝統は受け継がれています。

この自重互敬の基盤となるのが、「自分自身を大切にすること」です。皆さん一人ひとりが今ここにいること自体が奇跡であり、かけがえのない大切なことです。自分自身を大切にすることが、「一人ひとりのよさ」を認めることにも繋がると思います。

今日の日を一つの節目として、思いを新たに、朝日高校生徒としてどう

あるべきか、大学や大学の向こう側の社会でどう生きるべきかを考え、未来を見つめ努力を重ねていってください。

皆さんの努力が、それぞれの人生を、一人一人の輝き方で輝かせるとともに、校歌に歌われている「昇る日の名に負う朝日」の姿に、更なる輝きを加えていくことを期待し、式辞といたします。

(県立岡山朝日高等学校 校長 竹田義宣)